

＜早稲田の本棚から＞館蔵資料紹介

萩原朔太郎「詩集 月に吠える」初版（削除版）3冊

（感情詩社・白日社出版部，大正6年[1917]，20×14cm，請求記号：①今井卓爾文庫（文庫3A）659
②衣笠詩文庫（文庫3）2458 ③衣笠詩文庫（文庫3）2459）

早稲田大学図書館の今井卓爾文庫、衣笠詩文庫より、萩原朔太郎の処女詩集『月に吠える』の初版を取り上げる。両文庫は、いずれも日本近代詩の一次資料として、質・量ともに国内有数のコレクションである¹⁾。

朔太郎が『月に吠える』を出版したのは大正6年2月である。大正11年には「再版」が出版されているが、両者の内容や装幀は同一ではない。まず最も大きな違いは版元で、再版が出版社の刊行であるのに対して、初版出版費用については朔太郎が開業医である前橋の生家に頼み込んで捻出した²⁾。同じ大正6年に処女詩集を出版した生田春月が「詩は、当時全く社会的勢力を有さず、詩人は自費出版の外に途がなかった」³⁾と述べている通り、これは当時の処女詩集刊行の形態としては珍しいことではない。一方再版がアルス社より刊行された大正11年は、詩人団体「詩話会」との結びつきによって新潮社からの詩集発刊が盛んとなった時期であり、商業出版として詩集が成り立つ時代であった⁴⁾。

また、『月に吠える』初版については、出版直前になって「愛憐」「恋を恋する人」の二篇が当局の指導によって削られるという「事件」が発生している。これについては近年になって、国立国会図書館所蔵本を基に削除の経緯および出版年月を推定した研究と、その研究に対する論考⁵⁾がなされており、興味深い。本学で所蔵する3冊はいずれも「削除版」であり、実際にこの箇所を見てみると、該当ページののどの部分までが切り取られ、切り取った部分に貼付する形で「注意 | その筋の注意により、「愛憐」「恋を恋する人」の二篇（一〇三頁より一〇八頁）までを削除す。」との紙が挟み込まれている。一方、再版ではこの二篇は削除されず収録されている。なお、初版でありながらこの部分が削除されていない「無削除版」の存在が知られており、もともと発行部数の少ない初版のなかでもさらに貴重な版となっている。



さらに、初版と再版では献辞も異なり、初版は「従兄 萩原栄次に捧ぐ」とされ、再版は「故田中恭吉の霊に捧ぐ」とされている。再版にある田中恭吉は『月に吠える』に挿画を提供した夭折の版画家である。『月に吠える』出版前に没したが、盟友の恩地孝四郎によって詩集への提供が実現された。『月に吠える』出版当時の詩壇の反響は、口語自由詩運動の観点よりも詩、挿画、装幀の調和という観点からの賞賛が多く⁶⁾、田中恭吉の挿画を抜きにこの詩集の価値を語ることはできない。その意味で、詩歌集の装幀を重視された今井先生のコレクションをよく表す1冊であると言える。（総務課 長谷川敦史）

- 1) 「ふみくら 27 号」（1990 年）、「ふみくら 64 号」（2000 年）参照
- 2) 「詩壇に出た頃」『萩原朔太郎全集』補訂版 第 9 巻（筑摩書房，1987 年）所収。
- 3) 「大正年間の詩と詩人とに就いて」復刻版『生田春月全集』第 10 巻（飯塚書房，1981 年）所収。
- 4) 大正 10 年『日本詩人』創刊、大正 11 年『現代詩人叢書』刊行開始。朔太郎も『月に吠える』再版の翌年に、第二詩集『青猫』および第三詩集『蝶を夢む』を新潮社より刊行している。
- 5) 牧義之「萩原朔太郎『月に吠える』の内閣と削除」『伏字の文化史』（森話社，2014 年）、川島幸希『月に吠える』の論文『日本古書通信』2015 年 2 月号～3 月号。
- 6) 「詩集『月に吠える』について諸名家のこぼれ」『感情』大正 6 年 4 月号など。

※文中の画像は今井卓爾文庫本。